

家庭科教育における

大学・大学院との連携

京都教育大学附属高等学校

家庭科 稲木 昇子

1. はじめに

私は、教職に就いて今年20年を迎える。まず、京都府立高等学校で採用を受け、3年赴任した後、京都教育大学附属高等学校に着任した。教職20年といえば中堅の域であろうが、僅か教職4年目で公立を退職し、家庭科専任教官が1名である国立の附属高等学校に赴任し、最初の数年は他の研究会にも参加せず過ごしたことを振り返ると中堅などとは烏滸がましい思いである。

幸いなことに、京都府立高等学校では、早期から、男女共習「家庭一般」4単位を実施しており、その3年間に得たものは大きく、附属高等学校着任当初、まだ、女子のみ必修の「家庭一般」にも、共習の内容を生かして授業を行った。とはいっても、まだまだ知識・技術を身につけていかなければならない時期で、夏の文部省（当時）の主催する研修会では不安を覚え、他校の取り組みを学びたいという思いから、京都府立高等学校家庭科研究会に参加させて頂き、現在も研修会や実践発表会で交流を行って得てきたものを、附属高等学校の家庭科教育に取り入れている。

しかし、ひとりでは、教科教育について共同・協力作業はおろか、日常の些細な相談ですらできない。ましてや、本校のような中規模校では、分掌・クラブ指導に加えて各種委員会などの様々な校務を日々こなさなければならず、時間をかけて大規模な教材開発を行うことには限界がある。よって、京都府立高等学校での男女共習家庭一般を基盤に、資料や書籍からの知識を教材に追加し、少しずつ改良していくことで、本校の家庭科教育を行っていった。

2. 大学との連携

大学とは、附属着任当初より多少の交流をもっていたが、当時は大学院もなく、小・中学校を中心とした交流であった。本格的な交流は平成7年度からである。目的は、“一貫性を考慮した家庭科カリキュラム”を作成するということで、本大学家庭科教育の教授を中心に、小・中・高附属学校家庭科教諭の計8名で研究を行った。当時、「生きる力」を育む教育の必要性を打ち出されている中、もともと「生きる力」を問い続けてきた家庭科教育が、それぞれの時代の中で果たしてきた役割を客観的に評価すると同時に、時代の変化には関係なく根本的に果たさなければならない役割について考えていく必要性を感じた。そこで、まず小・中・高それぞれの学習者像を明確にし、そこに共通する基本的概念

と目標の観点により構成された基本カリキュラムを作成するものであった。このように、大学教官を中心に、一般公立校では難しい小・中・高の“縦”の連携は、附属ならではの特色である。現在も、生徒の自己評価など継続的に研究をし、実践交流を行っている。更に、平成12年度より、京都教育大学の研究体制が改革され、「附属教育実践研究指導センター 家庭科分科会」から「附属教育実践総合センター 家庭科分科会」と変更された。それまでは、家庭科教育の教授との交流が比較的多く、上記のような研究を行ってきたが、改革を機に、この分科会は大学家政科の殆どの教授と各附属学校の家庭科教諭全員によって構成され、現在は、主に各附属学校の実践報告をもとにして、題材の継続性や適時性について意見交換をしたり、各分野の教授より専門的なアドバイスや知識を頂くなどの交流を年5・6回行っている。

今回は、このような交流の深まる中で、大学と附属高等学校の交流実践報告を2つしたい。正確に言えば、教授の指導を受けている大学院生により組み立てられた高等学校家庭科の授業の実践である。1つ目は、平成12年4月に実施した、「保育」分野の導入である。2つ目は平成13年5・6月に実施した「住居」分野全体である。ひとりではなかなか思いつかなかったり、新しい教材作成のための労力・時間を費やすことが困難であったりする状況の中、大変価値のある交流と考える。

3. 実践報告

(1) 保育

①経過

平成12年1月頃、大学教授より依頼があった。内容は、大学院教科教育専攻家政教育専修の学生の修士論文「親になるための教育」に関する研究において、調査をしたいということであった。附属高等学校の家庭科カリキュラムでは、「保育」分野は2年生の12月頃の予定ではあったが、その内容は導入に使えると考え承諾した。実施に際しては、家庭科教員が行うと先入観や不必要な知識を与えて調査の趣旨を曲げてしまうおそれもあるため、院生本人が行うことになった。4月までの間に数回、事前・事後アンケートや調査項目について意見交換を行い、4月に2年生の授業を各クラス2時間分ずつ提供した。もちろん家庭科教員も立ち会い、生徒を観察したり、邪魔をしない程度に支援をした。

②実施

内容は、「親になること」「子どもを育てること」を学ぶ上で、どのような学習方法が有効かを考察して、定位家族を振り返る方法と将来の創造家族を考える方法の相違した迫り方で、それぞれの方法が学習者の意識にどのような違いをもたらすかを研究するものであった。前者には、〈マイストーリー〉(資料1)といって、物語りに従って自分自身を振り返りながらワークシートを完成させていくもので、後者は、

《はじめての育児日記》（資料2）で男女ペアになって一緒に創造しながら親になったつもりでワークシート上の子育てをするものであった。

院生は、修士論文という研究の目的で生徒に実施した内容だが、附属高等学校家庭科にとっても、「保育」の課題を考えさせるための導入となる。これまで保育分野の導入は、近年に発生した事件を話題にし生徒達に考えさせることが多かったが、このように自分を振り返らせたり、男女が協力して親の立場となって考えさせたりすること、より身近に感じさせられることができる。

③生徒の反応

4月、実施前に大学との連携・調査の目的などを、家庭科教員と院生から生徒達に説明する。教育実習慣れをしているせい、生徒はすぐに対応することができた。振り返りは、出生当時の話を聞くことがあまりないのか、苦勞していた。ペアの方は恥ずかしがりながらも楽しんで創造していた。共に、ワークシートを完成していくにつれて、「子ども」や「親」について様々なことを感じ、考えたようである。

実際の授業は、12月であり、大体の調査結果を院生から聞き、更に4月を振り返りながら授業を進めたが、次回は「親になること」の直前の導入に利用したい。

（2）住居

①経過

平成13年1月頃、またもや大学教授より依頼があった。大学院で住居学を専攻している院生の開発した教材を、授業で実施してみたいというものであった。附属高等学校の家庭科では、今まで「住居」領域を他の領域の中で扱ってはきたが、独立させて「住居」を年間計画に組み込んでいなかった。一からのスタートである。以前より「住居」領域を取り入れようと考えてはいたが、いざ実行となるとどのように扱うべきか思案していた。これは、「住居」に取り組むよいチャンスであると考えた。

3・4月に授業の目的を確認し、院生と共に、住居に関する学習を行い、院生が作成した指導案を再度検討した。（資料3 抜粋）

実施は2年生全クラスで、5・6月に各9時間を設定した。最終的には、コンピュータを使用して小規模住宅に家具を配置するという演習を行うものである。そのソフト開発や操作マニュアル（資料4 抜粋）は院生が作成した。

また、演習の評価も院生が行った。

②実施

コンピュータ演習に至るまでの6時間の授業は、院生の作成した指導案をもとに家庭科教員が実施する。6時間の内容は、主に「住生活の成り立ちとその変遷」「住まい方」について、プリントや資料を用いて座学で行う。コンピュータはWordを使い、2時間で演習内容（資料5）や操作の説明（資料6）をした後、実際コンピュータを使用して演習を行った。最後の1時間は、演習の目的と評価方法について、その

要点を振り返りながら解説するものであった。

③生徒の反応

初めの6時間の座学授業は、普段の授業スタイルとほぼ同じであったが、コンピュータ授業になると、Wordによる簡単な操作であったこともあり、目を輝かせて取り組んでいた。特に、コンピュータの好きな生徒は、指定された家具の他に独自で作成した家具も配置したり、色付けや模様付けを行ったりもし、全員が楽しみながらも目的にあった住居の学習ができたようである。後に聞いたコンピュータ学習についての生徒の反応は、“もう一度したい” “他の領域でもコンピュータを取り入れて欲しい” というものであった。

4. 利点と課題

先に述べたように、ひとりでの教材開発が困難な中、若い院生の発想は私にとっては大きな糧となる。その教材に、改良を加えたり、用いる時期を考慮したりすることで、家庭科教育に新たな展開ができる。特に、コンピュータを利用した授業は、残念ながら自分の力だけではできない。今回、院生は本校のコンピュータのために、かなりの努力・工夫をしてくれた。このような力強い協力者に恵まれたことは、幸運かもしれない。

しかし、この2例には共通する課題がある。大学院の修士論文のための調査であったり、演習であるため、どうしても実施時期が1学期となる。その年の1月頃に依頼を受け、承諾するには、本校の家庭科教育年間計画を変更しなければならない。本校では、生徒の年齢と、取り扱う教材の内容や時期を考慮して年間計画を立てているが、必要とあれば多少の変更はやむを得ないのかもしれない。更に、院生による調査・演習の分析結果の発表も、その年度は翌年3月（修論発表会）となり、題材を取り扱う期間内に間に合わず、家庭科教師自身が独自の評価を行い、院生による分析を利用することができない。

また、「住居」のように院生の指導案に基づいて授業を展開する場合、大学教授や院生（専門）の思いと高等学校家庭科教師の思いとが一致しなければ、実際授業を展開する家庭科教師が矛盾や疑問を途中で抱いてしまうことになる。事前に相互の検討をしっかりと行うことの重要性を感じた。

今回までには無かったが、教材や分野によっては、生徒の実態を踏まえて慎重に対応していかなければならないものも、今後あるであろう。

5. おわりに

大学と附属学校とが連携するということは、大学にとっても教授・学生の研究や院生の修士論文のための調査・演習が実践できるという利点があり、附属高等学校にとっても、教材開発の良き協力者を得るという利点がある。言わば、“一石二鳥”のような関係であろう。

お互い、思いは相違する場合もあるであろうが、協力して実践して行くためには、常々の交流の大切さを実感している。たまたま、私自身が本学出身で、家庭科教授とは以前から面識があったことも大きい。が、本学の“附属教育実践総合センター 家庭科分科会”で、小・中・高の実態を報告し、課題となる点を大学教授や校種の異なる家庭科教師の様々な見地で分析するという交流があってこそ、今回のような実践が可能となったのである。

現在、家庭科部会では、大学と附属学校の更なる交流を深めるための検討を行っている。

資料1

マイストーリー

年 月 日 名前

★この物語の主人公はあなた自身です。各項目について、あなた自身を振り返りながら記入してみてください。どんな物語になるかはあなた自身によって決まります。物語中の父親・母親のところでは当てはまる方に○をつけてください。両方に当てはまる場合は両方に○をつけてください。では、どうぞ。

最初に… 私は、現在 歳 です。

A 私は、19 年 月 日に、

という人たちから、

込められつつ、この世に誕生しました。 という願いを

私が、誕生したことを一番喜んだのは

です。

私が、保育園・幼稚園に通っている頃（詳しく言えば 歳の時）

という

出来事がありました。

その時、父親・母親の様子（反応）は

でした。

B 今思い返すと、小学生時代、私の最大の思い出は、

このことを 父親・母親 は

でした。

な雰囲気を持つこの家庭で育った私は

な小学生でした。

C 中学生になると私は 人間になりました。

それは、

ことがあったからだと思います。

父親・母親 はこういう私について、いつも

でした。

D 今、私も時には、深く悩むことがあります。そんな時、私の心の支えは

です。

私が、心の底からほっとするのは

で、

している時です。

今、思い返すと私の 父親・母親 はいつも、

でした。

そして、私は

なっただけです。

E いつか、私が家庭を待った時、私は、きっと今の 父親・母親 のように

私はそういう日が来るのが

です。

つづく...

★これからあなたの物語はまだまだ続いてゆきます。

この瞬間にはどんな役割の登場人物が出てくるでしょうか？挙げてみましょう。

資料 2

はじめての育児日記

★これは、あなたが親になったつもりで書く育児日記です。お父さん役の人はお父さんの顔を、お母さん役の人はお母さんの顔をペアと（紙型夫婦）一緒に想像しながら話し合い、記入していきましょう。

まずは、***ちゃんの様である自分の状況を想定してください。

お父さんの名前（姓 名） _____ 歳 職業 _____

お母さんの名前（姓 名） _____ 歳 職業 _____

私たちの子どもは 2歳 の 男の子 女の子 （どちらかに○）

私たちの子どもの名前 _____

＊月＊日、今日はとても天気の良い日曜日です。8時に *** ちゃんは起きました。

朝日、食事をとる時は *** ちゃんに手が届かるので、

お父さんは _____ して、

お母さんは _____ することにしています。

*** ちゃんの毎日の食事で、気をつけている事は

_____ です。

でも最近、食べる量が少なくて心配です。そこで、お父さんとお母さんは

_____ することにしました。

*** ちゃんは食べている時の、スプーンの持ち方がちよっと変です。お父さんとお母さんは相談して、 _____ することにしました。

昼間、家族3人で電車に乗ってお買い物に行くことにしました。電車の中で、大きな盲導犬に出くわしました。

犬にびっくりした *** ちゃんは大声で泣き出しました。隣りにはたくさんのお客さんが乗っています。

お母さんは _____ して、

お父さんは _____ して、

やっこのことで *** ちゃんは泣きやみました。

夜になって、ぐっすり眠っている *** ちゃんの寝顔を覗ながら、

お父さんは 「俺たちの娘もこういう気持だったのかなあ。」 と言い、

お母さんは 「子どもを育てるって _____ と言いつつ、

と、言い、

お父さんは 「子どもを育てるって _____ と、言いました。

【住居領域指導計画】

小規模住宅演習を行うに当たって

＜第一次「小規模住宅演習にむけて」の構成とねらい＞
まず、これから取り組む演習による授業のプロセスは、演習の理解である。家族の構成、図面についての計画の立て方について再度学習を行う。計画のしかし、当演習で見たいのは、これまでの授業の理解の説明は避けるようにする。今までの授業の中で、どのように注意する。考えられる間違いは第3次「小規模住宅演習」で認させる。

住空間計画の進め方

- ① 経済的制約などから住宅規模を考える
- ② 家族構成の確認
適正就寝による寝室数の割り出し
- ③ 家族の生活行為と必須空間の確保
食事空間については、食寝分離を考慮する
人体寸法・動作分析・動線の検討・必須家具
- ④ ①②③から、必要とする部屋ないし空間を決める
玄関、トイレ、洗面所、浴室などは別に面積の広さによって、居間と食事室を同じになる

N・D・K	N・D・L
N・L・D・K	N・L
N・LD・K	N・L

N：私室あるいは寝室数

K：台所

客間なども独立して設けるか、どこに

- ⑤ 各部屋の起居様式を決め、そこでの生活
- ⑥ 各部屋、各空間の平面計画上の方位
- ⑦ プライバシー（視線・音・出入り遮断）
- ⑧ 各個人の創意工夫を考える

住宅プラン：2DK

家族構成：4人

夫婦と子供2人

同姓（長男：高校）

（長女：高校）

住居領域指導計画

総時間 9時間

【住生活の設計】

9時間

1 住生活の成り立ちとその変遷

1時間

*住まいと風土

2

*居住方式と居住性

*住まいをめぐる諸問題

2. 住まい方

7時間

*住まい方の思想

1時間

*住まい方の方式

1時間

*住まい方の計画

2時間

住空間の計画『小規模住宅演習』

3時間

3. 住居の維持管理

1時間

*住居費

【小規模住宅演習】

指導案（総時間 4時間）

第1次＜小規模住宅演習に向けて＞

2時間

コンピューターの基本操作

1時間

住生活の計画

1時間

第2次＜小規模住宅演習の実施＞

1時間

第3次＜小規模住宅演習を終えて＞

1時間

発表

30分

グループ活動

30分

授業の展開

事前アンケート

第1次「小規模住宅演習にむけて」Wordの基本操作の説明

①住生活の設計

②コンピューターの操作の理解

③マウスの操作の理解

④Wordの機能の理解

第2次「小規模住宅演習の実施」

⑤家具の色付け

⑥家具の配置

⑦保存

⑧印刷

第3次「小規模住宅演習を終えて」

⑨発表

⑩課題作品の評価

【Word 基本操作マニュアル】

小規模住宅 指導案

単元名「小規模住宅演習」指導案（Word 基本マニュアル）

指導目標

- ・小規模住宅演習を行う前にWordの基本操作を学習する
- ・コンピューターソフト『Word』を使って住み方の演習を行う

指導事項（導入）

はじめに（先週までのおさらい）

住生活の設計

住生活の成り立ちとその変遷

- ・住まいと風土
- ・居住方式と居住性
- ・多様化する住生活

住まい方

- ・住まい方の思想
- ・住まい方の方式
- ・住まい方の計画

本時の学習目標

コンピューターについて

マウスの使い方

マウスの基本操作は、「ポイント」「クリック」「ダブルクリック」「ドラッグ」の4つです。一般的にこれらの操作はマウスの左ボタンを使って操作をします。この他に、マウスの右ボタンを使って操作をする「右クリック」があります。（黒板で説明）

「ポイント」

マウスポインタを目的の一点に合わせる

「クリック」

マウスポインタを目的の位置に合わせて、マウスの左側のボタンを素早く1回押してはなす

「ダブルクリック」

マウスポインタを目的の位置に合わせて、マウスのボタンを素早く2回押してはなす

「ドラッグ」

マウスのボタンを押したままマウスポインタを移動し、最後にボタンをはなす

「右クリック」

マウスポインタを目的の位置に合わせて、マウスの右側のボタンを素早く1回押してはなす

今日はWordを使って小規模住宅の演習を行います

上隅にある×ボタンをクリックして、終了させます。

★Wordを終了するには

Wordによる文書の編集や印刷を完了したら、必ずアプリケーションを終了します。Wordには、いくつかの終了の仕方がありますがここでは、2つの方法を紹介します。

①×ボタンを使った終了方法

タイトルバーの×ボタンをクリックします

②メニューを使った終了方法

まず、「ファイル」をクリックして、「終了」をクリックします

という会社が開発した
ワープロとして、文
はこのWordを使い
ときに使用するソフ
のため今まで使っ
て行いする必要があり

かし始めることで、

」に合わせます。そ

でダブルクリックを

動はできましたか？

よ、ウィンドウの右

小規模住宅演習

コンピューターの記録 → 図面の表示

- ① 電算を入れる
- ② エグスプローラーを開く (ダブルクリック)
- ③ CDドライブを左クリックする。
- ④ 【小規模住宅演習】を左クリックする。
- ⑤ 【小規模住宅演習B4版】を開く。

開閉りがあらわれる。

演習の説明

演習の画面は、公園住宅の2DKのテラスハウスB4版である。

【家族構成】

夫婦：夫42歳、妻40歳

子供：高校生(15歳)

小学生(10歳)ただし性別は同様

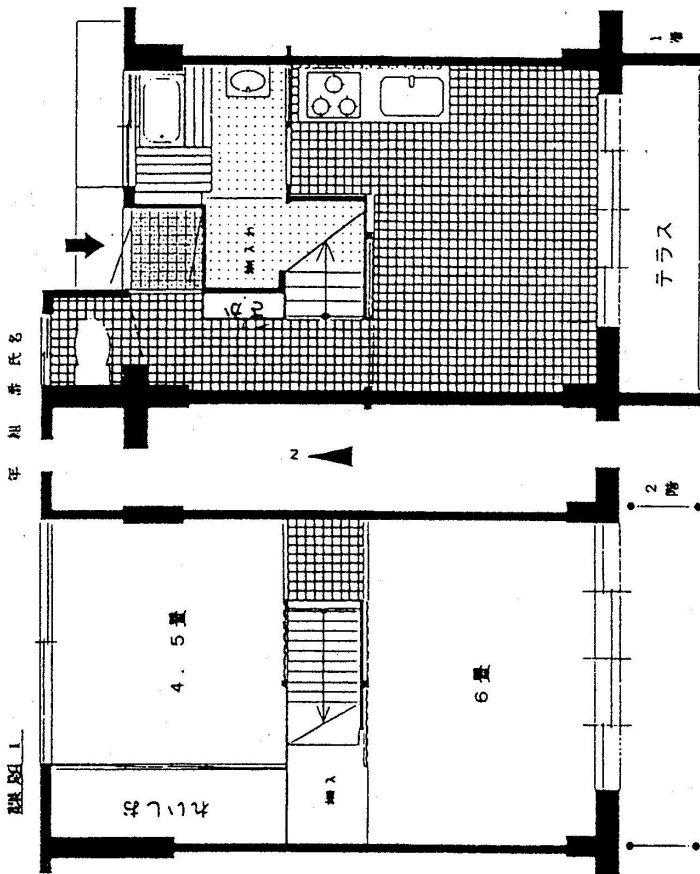
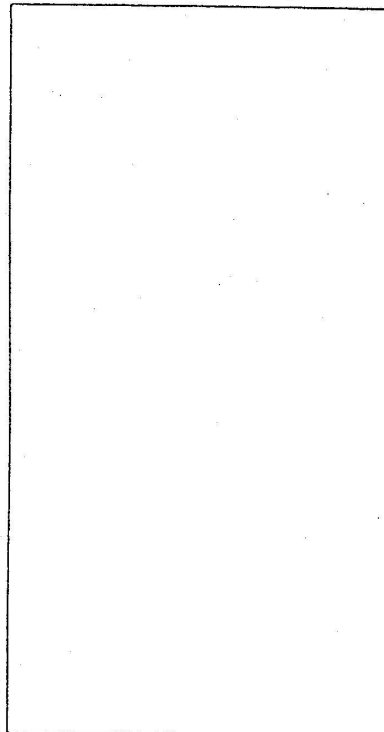
注1) 2階建て長屋。1階には専用庭がある。

【問題を速める上でのメモ】

- ・1階の物入れは、玄関、ふちの両方から使える
- ・玄関の外は、すぐ道路に面している。テラスの南面に専用の庭がある。
- ・2階6畳側から使う物入れは、廊下(下に階段があるので)となっている。
- ・2階南面は、ベランダになっている。
- ・用意された家具は全て設置する。

これらのことを、考慮して住みやすい問題を完成してみよう。

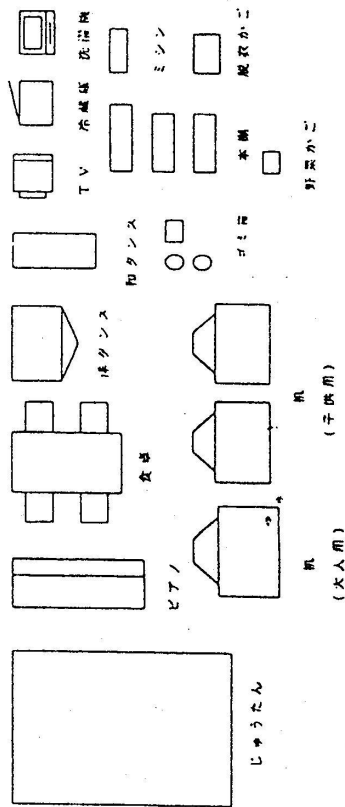
ノート



問題：下に示している家具のうち、収納家具は赤色に、その他は黄色に塗りドラ

ッグして、上野平面図に配列せよ。

なお、下記以外の家具で、追加したいものがあれば追加せよ。(縮尺1/50)



I. 移動

II. 回転

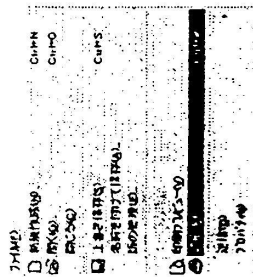
III. 色つけ

IV. 印刷

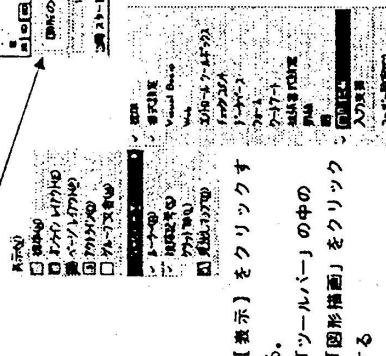
*間違った人は
出来上がったら、
名前を書いてあるか確
認して印刷する。

IV. 印刷

出来上がったら、
名前を書いてあるか確
認して印刷する。



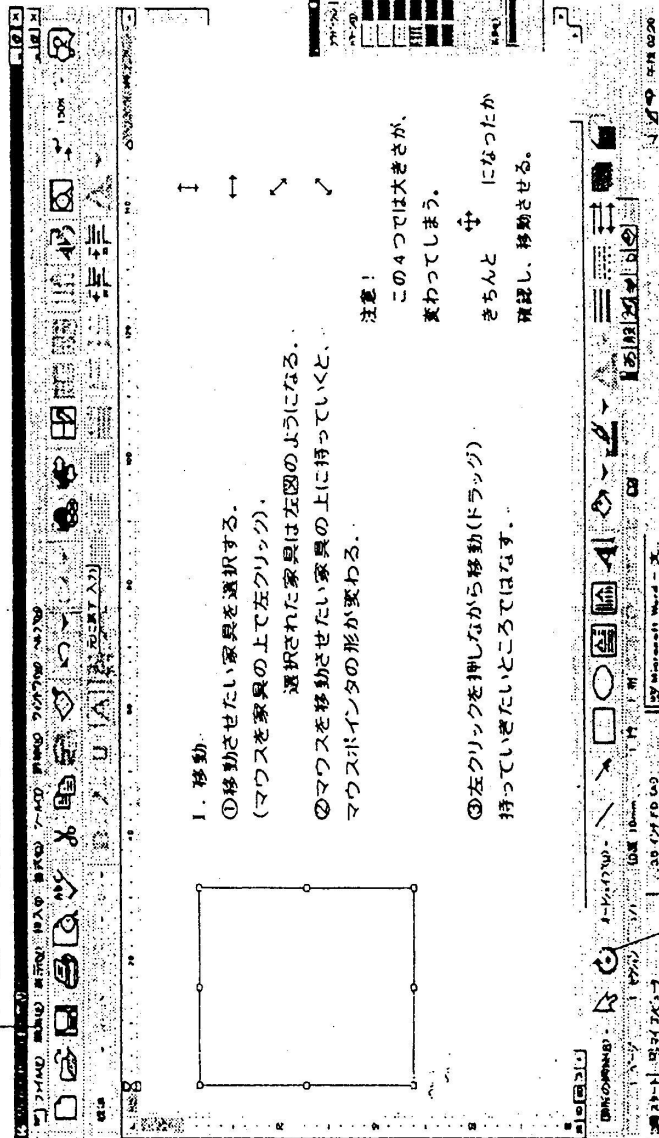
「図形の要素」が出てない人は



【表示】をクリックす
る。
「ツールバー」の中の
「図形描画」をクリック
する

*間違った人は

をクリックするか、
【編集】の中の「元に戻す」を
クリックする。
(間違ったところまで)



I. 移動

①移動させたい家具を選択する。
(マウスを家具の上で左クリック)。

②マウスを移動させたい家具の上を持っていくと、
マウスポインタの形が変わる。

注意！

この4つでは大きさが、
変わってしまう。

きちんと 中 になったか
確認し、移動させる。

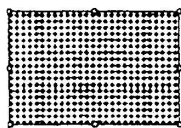
③左クリックを押しながら移動(ドラッグ)
持っていくきたいところではなす。

① 回転させたい家具を選択する。

② マウスポインタの形が変わる。

③ 中 になったことを確認しクリックす
る。

④ [Shift] キーを押しながら回転させる。

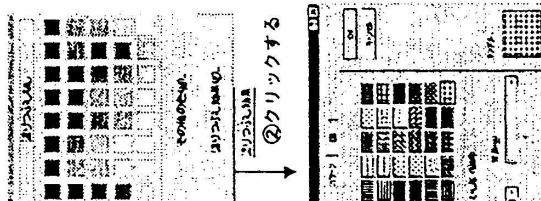


III. 色つけ

①模様をつけたい家具を選択す
る。



下矢印をクリックする



③模様を選択し、
OKをクリック